

学習評価入門

Kitagawa Takeshi

北川 剛司

奈良教育大学 教職開発講座

学習評価入門

奈良教育大学 教職開発講座 北川 剛司

I 学校教育におけるさまざまな評価

学校教育ではさまざまな「評価」が行われています。読者のみなさんが「評価」と聞いて、まず思い浮かべるものはなんでしょう。「成績表」や「テスト」といったものを浮かべる方が多いでしょうか。もちろん、それらは「評価」といってよいでしょう。これらは「学習」に関する評価であることから、特に「学習評価」と呼んで区別することもあります。

この「学習評価」は学校教育で行われる評価の中心と言えるものですが、実際には、他にもさまざまな評価が学校教育のなかでは行われています。一例として、「授業評価」や「カリキュラム評価」といったものがあります。これらは教師が「授業」や「カリキュラム（教育課程）」に関して、それらが良かったかどうか（よく機能したかどうか）を把握しようとするものです。このように、読者のみなさんに馴染みの深い「学習評価」のほかにも、学校教育においてはさまざまな種類の評価が実施されています。

なお、本稿の以下の部分では、「学習評価」のことを扱った内容が中心となります。

II 評価の目的

評価には主に二つの目的があります。一つは、判定（判断）することです。評価の対象について、その状態（状況）が、目標に達しているのかいないのか（あるいは5段階で言えばどの段階にあたるのか等）を判定（判断）することです。こうした目的で用いる評価のことを「評定」と呼んで、「評価」とは区別

することもあります。このような評価は、通常の場合、教育実践の一つの区切り（例えば、単元ごと、学期ごと、学年ごと）の最後において実施されます。

評価のもう一つの目的は、改善することです。改善のための評価は、児童生徒の学習状況について把握して、その後の教育実践を調整することを評価の目的と考えます。評価そのものが目的であるというよりは、評価は教育実践をより良いものとしていくための手段とみなされます。このような目的で行われる評価は、教育実践の途中のその時々において実施される必要があるでしょう。

このように、一言で「評価」といっても、目的によって機能が全く異なります。評価を行うにあたっては、目的を混同しないようにしなければなりません。例えば、判定（判断）のために実施した評価から、改善のための情報を必ずしも得ようとする必要はありません。また、改善のために日常的に実施する評価を判定（判断）に加味しようとする、教師も生徒も評価のことを常に意識しなくてはならなくなり、日常の教育実践にさまざまな問題を引き起こすこともあります。

近年、学校教育では、よりよい教育を目指して評価の活用が重視される傾向にあります。評価のための学習となるのではなく、あくまで学習のための評価であるということに留意する必要があるでしょう。

Ⅲ 評価の方法—児童生徒に育てたい力と評価方法の関係—

学習に関する評価の方法は、次のような分け方をすることができます。一つは筆記式の方法、もう一つは実演式の方法¹です。筆記式の方法とは、紙に書かれた問題（課題）について児童生徒に筆記解答させるいわゆる「ペーパーテスト」と呼ばれる方法のことを言います。一方、実演式の方法とは、児童生徒に筆記解答以外の実演を要求する方法のことを言います。例えば、体育の跳び箱、音楽の演奏、朗読、英語によるスピーチといったものを実演させてみて評価を行います。

このように、学習に関する評価について、現在では、筆記式の方法に限定することなく、実演式の方法も用いて多面的に評価することが必要であるという

¹ 実演式の方法は近年では「パフォーマンス評価」と呼ばれています。

ことが言われています。現在において、このような認識が広まっている背景には、ペーパーテストで測ることのできる学力以外の学力にも注目が集まっていることが挙げられます。

さらに、学力には単純なものもあれば、複雑なものもあると考えられるようになってきました。近年では、実生活や実社会にある複雑な諸問題に対応できるようになるために、それにつながる学力を児童生徒に育成することが学校に期待されるようになってきました。こうした複雑な学力を育てるために、その評価方法にも注目が集まっています。

図1は堀と西岡によって作成された評価方法の分類に関する図です。評価の方法といっても、選択解答式のペーパーテスト（左上）だけでなく、実にさまざまな評価方法によって全体がカバーされていることが分かります。複雑な学力に対しては、プロジェクト型のパフォーマンス評価が提案されています。

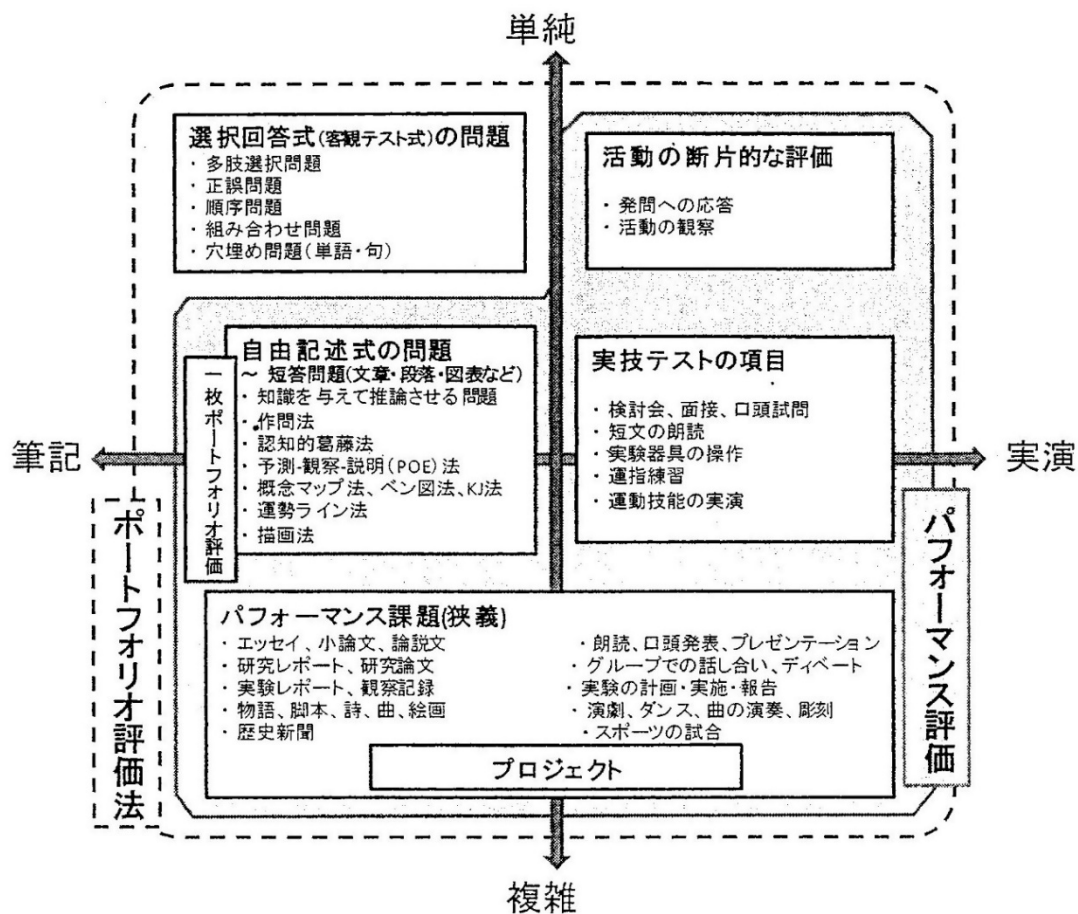


図1 評価方法の分類

出典：堀哲夫、西岡加名恵（2010）『授業と評価をデザインする理科』日本標準

IV 所有論的学習評価の先へ—学習評価の課題—

これまで伝統的に、学力を所有論でとらえるという考え方が普及しています。つまり、「学力」は個人の所有物であり、一旦所有してしまえば、どのような文脈や条件の下であっても変わらないとみなされます²。

この所有論的な考え方に対しては、近年、再考が迫られています。「問題解決力」という学力を例にすると、所有論でいうところの「問題解決力がある」という状態は、どのような問題に対してもそれを解決する力がその個人にあるということになりますが、それは通常ありえません。

理科の教科内容に関わる問題解決は得意だが、数学の教科内容に関わる問題解決はそれほど得意とはいえないというように、あるいは、このチームであればいつもうまくいくが、そうでないとうまくいかないというように、複雑な学力であるほど、それが発揮される文脈や条件を考慮に入れる必要があります。

従来、学力を所有論的にとらえた学習評価が盛んに議論されてきました。所有論的学力観の下で、知識の量や単純な技能のような「見えやすい部分」以外に、複雑な学力のような「見えにくい部分」をいかにして評価するかという議論はすでにかかなりの蓄積があり、それに関する成果も多数挙がっています。

だが一方で、実生活や実社会にある複雑な諸問題に対応できる力につながっていくような学力を評価しようとする場合には、所有論的なとらえ方ではなく、文脈や条件等を考慮にいった学習評価の方法が、今後、一層探求されていく必要があるでしょう。

² 身近な例として、アニメ作品「ドラゴンボール」では、「戦闘力」という数値がそのキャラクターの「強さ」を表すバロメーターとして用いられますが、これは「強さ」に対する所有論的なとらえ方になります。つまり、「戦闘力」が自身より低い相手であれば、それがどのような相手であっても、また、どのような文脈や条件においても、戦闘すれば「勝てる」という考え方です。

北川 剛司 (Takeshi Kitagawa)

2007年 広島大学大学院 教育学研究科 修士課程修了
修士(教育学)
2010年 同大学院 博士課程単位取得満期退学
2010年 高田短期大学 子ども学科助教を経て、
2013年 奈良教育大学 専任講師



【研究テーマ】

専門は「教育評価」です。米国の評価論を中心に、教育評価の方法について研究しています。教育評価といえば、近年、目標準拠評価（絶対評価）に注目が集まっていますが、私の研究の主な関心は、そうした目標準拠評価ではとらえられない側面に関する評価方法や、実行可能性を視野に入れた評価方法の理論を構築し実証することにあります。

【著者の自己紹介】

ー趣味

旅行です。まとまった時間がとれるときは、海外旅行などに積極的に出かけていろいろなことを見て経験をしています。

ー高校や大学でやってほしいこと

高校生や大学生のときに、「先生」に「出会って」ください。ここでいう「先生」というのは、立場としての教員のことをいうのではありません。自分が誰かを「先生」だと思った時、「先生」は現れます。このように考えると、「先生」は待っていてもやって来ません。自分から関わりをもって、話をしたりして、誰かのことを尊敬できるようになった時にはじめて「先生」に出会えます。つまり、「先生」に出会うには、みなさん自身の働きかけが必要となります。素敵な「先生」との出会いは、みなさんのその後の人生にとって、きっと意味を持つと思います。ぜひ、「先生」に出会ってください。

学習評価入門

著者 きたがわ たけし 北川 剛司

2017年3月31日 第1版

奈良教育大学出版会

〒630-8528

奈良市高畑町

TEL: 0742 (27) 9135 FAX: 0742 (27) 9147

E-mail: g-kenkyu@nara-edu.ac.jp

URL: <http://www.nara-edu.ac.jp/PRESS/>